大館市教科学習推進委員会だより（第１号）

こころみ

2008.7.22
担当：校長会

４　授業において取り組むべきこと

【ポイント】文章の読み取りでは，文章中の語句の働きを踏まえて内容を理解し，目的や条件に応じて自分の言葉で説明する練習，古典では主語をとらえて内容を把握する練習，作文では自分の考えが効果的に伝わるように構成を工夫する練習を重ねる。

枠内は，平成２０年度の秋田県高校入試「国語」についての「授業において取り組むべきこと」の【ポイント】部分です。…「２　得点分布と得点分布グラフ」，「３現状の分析」の内容の後に記載されていました。

中学校の先生方にとっては学校にこのような資料が届くのは当然のことと思いますが，小学校にとっては，画期的なことと，驚きをもって受け止められたのではないでしょうか。私もまたそのように感じ，そして「いよいよこのような時期が到来したのだな。」と感慨深く思った一人です。

大館市教科学習推進委員会より第６次学力向上対策が提言され，今年度はその１年目です。今年度第１回の教科学習委員会では，県の重点課題である「読解力の向上」を「こころみ」でも取り上げていこうということになりました。折しも，今年は有浦小学校で「国語力向上」の文部省公開授業が行われたり，秋田県国語教育研究協議会大館北秋田大会がここ大館市を会場に行われ，小学校では城南小学校で１年生から６年生までの全学年の授業，中学校では，二中で１年生，東中で２年生，田代中で３年生の授業が公開されることにもなっています。どちらでも読解力や思考力が研究と関わっていますので，それらの関連といった観点から「読解力」にスポットを当て，分かりやすいと思われる著書から紹介してみたいと思います。

～　＜読解力について＞　～

※田中孝一・小森茂編著「読解力」で授業を変える　ぎょうせい 参照

１　文部科学省「読解力向上プログラム」（２００５年１２月）によると，学校教育・国語科と「読解力」との関係が次のように解説されています。

学習指導要領国語では，言語の教育としての立場を重視し，特に文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め，自分の考えを持ち論理的に述べる能力，目的や場面などに応じて適切に表現する能力，目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度が重視されており，これらはＰＩＳＡ型「読解力」と相通じるものがある。

「読解力向上プログラム」ではＰＩＳＡ調査から判明した学校教育の課題を，次のように述べています。

我が国の子どもは，「テキストの解釈」（書かれた情報がどのような意味を持つのかの理解・推論が必要な問題），「熟考・評価」（テキストに書かれている事と知識・考え方・経験等との結びつけが必要な問題），とりわけ「自由記述（論述）」の問題を苦手としていることが明らかとなった。この結果は，ＰＩＳＡ型「読解力」の課題が「読む力」にとどまらず，「書く力」や，特に「考える力」と関連していることを示唆している。

※この著書では，次のように記載されています。

このように，我が国の一人一人の子どもたちが，「生きる力」「人間力」を獲得するには，「読む力」だけでなく，「書く力」や，特に「考える力」と関連していることを充分に意識して，国語科等の各教科の特性や役割を生かしながら，学校教育全体で授業改善に取り組むことが肝要である。

※また，～国立教育政策研究所編「生きるための知識と技能３」（ぎょうせい２００７年）によれば～「科学的リテラシー平均得点の国際比較」（科学的リテラシー全体６位，科学的な疑問を認識すること領域８位，現象を科学的に説明すること領域７位，科学的根拠を用いること領域２位）をあげ，以下のように述べられています。

このように，２００６年度の国際結果は「日本の科学的リテラシー全体の平均得点は５３１点で，フィンランド，香港についでカナダから韓国までと統計的な有意差がないため，上位グループに位置しているといえる」のである。

特に，「科学的証拠を用いること」領域では，第２位に位置しており，今後も，学校教育は自信をもって取り組むことが大切である。

※また，上記の国立教育政策研究所編「生きるための知識と技能３」読解力における習熟度レベル別の生徒の割合の表（１未満～５）をあげ，次のようにも述べています。

日本の場合，レベル１未満～レベル２の生徒の割合はＯＥＣＤ平均よりも少なく，レベル３～レベル５の生徒の割合はＯＥＣＤ平均よりも多い。また，日本の生徒の６０％はレベル３以上に位置している。

※これについて，以下のように記載されています。

このように，読解力の学習状況は良好であるが，レベル１未満とレベル１の１８．４％の生徒一人一人のやる気，本気を耕しつつ，基礎・基本の確実な習得を図るような授業改善を推進したいものである。その際，生徒一人一人の学習状況を的確に評価し，個に応じた指導の充実を図ることも「読解力」で授業をかえることである。この実践課題に取り組むことも，「読解力」で授業を変えることである。

※また，上記の国立教育政策研究所編「生きるための知識と技能３」読解力問題の分類と正答率を高い順に配列した表が掲載され，以下のように記されています。

これによれば，正答率が上位１０位の問題は，解釈７問，情報の取り出し２問，熟考・評価１問である。これは，我が国の生徒たちの読解力についての良好な（得意な）側面であろう。であれば，正答率が上位の解釈（書かれた情報から推論して意味を理解する），情報の取り出しというよう良好な（得意な）側面を伸長させる工夫も「読解力」で授業をかえることである。

次に，正答率が下位１０位の問題は，熟考・評価５問，情報の取り出し３問，解釈２問である。これは，我が国の生徒たちの読解力について，努力を要する（不得意）な側面であろう。

であれば，正答率が下位の熟考・評価（書かれた情報を自らの知識や経験に位置付ける），情報の取り出しという努力を要する（不得意な）側面を，意図的・計画的に改善する創意工夫も「読解力」で授業をかえる重要な実践課題である。

また，出題形式では，正答率が上位で１位の問題は，多肢選択問題であり，正答率が下位１位の問題は，自由記述問題である。出題形式でも，多肢選択問題に取り組むよさを伸長し，意図的・計画的に自由記述問題に取り組むことも「読解力」で授業をかえることである。

＜各学校で求められる授業改善の方向－３つの重点目標＞

※文部科学省「読解力向上プログラム」（２００５年１２月）では，各学校において，国語科を中心としつつ，各教科，「総合的な学習の時間」等で，次のような具体的な方向－３つの重点目標が提案され，著書では，に記載されています。

【目標①】テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実

この【①】の実現には，国語科等の各教科は，これまで同様（以上）に相手意識，目的意識，条件や状況意識等を意図的・計画的に「本時の学習指導案」等の学習指導計画に位置付ける必要がある。それは，児童生徒一人一人の学習意識を確立することである。

【目標②】 テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実

この【②】の実現には，国語科等の各教科は，これまで同様（以上）に，誰に対して，何のために書くのか（相手や目的意識，条件や状況意識）をしっかりもって書く活動の「場面と時間」を意図的・計画的に「本時の学習指導案」等の学習計画に位置付ける必要がある。それは，児童生徒一人一人が自分の考えを表現することで，自分の考えを対象化し，自分の考えを深化させる学習課程を確立させることである。その際，自分の実生活や行動と関連付ける指導も意図的・計画的に展開することも重要な自薦課題であり，「読解力」で授業をかえることである。

【目標③】様々な文章や資料を読む機会や，自分の考えを述べたり書いたりする機会の充実

この【目標③】の実現には，学校教育全体で，朝の読書の推進を含め，読書活動を推進すること等，読書の推進を教育過程にしっかり位置付けることである。具体的には，「本時の学習指導案」等の学習指導計画に，様々な文章や資料を読む機会や自分の考えを述べたり書いたりする機会を意図的・計画的に位置付けることである。 その際，児童生徒の読書生活が一層充実するよう，「保護者」等の連携を図り，我が子の家庭生活や地域での読書活動を励ますような評価を活用することも，「読解力」で授業をかえることである。

☆　７月１７日に城南小学校で行われた秋田県国語教育研究協議会大館北秋田大会（思考力に関わるテーマ）研究部会の教育専門監の京野真樹先生による３年生の授業に，城南小学校の先生，研究部員の方々の参観はもちろんですが，国語力向上の公開を行う有浦小学校の先生方も参加されました。共に学ぼうとする先生方の高い意欲の現れと喜び，そして尊く思っています。今年度９月，１１月に開催される国語科に関わる二つの大きな公開研究会を大いに活用し，大館市の子どもたちのさらなる読解力，国語力向上に努めましょう。